

< 平等化 > の根拠と < 不平等処遇 > の根拠

——規範性を志向する思考から——

西 口 正 文*

The Basis of *Equalization* and the Basis of *Unequal Treatment*
—From the Thinking Intending for the Nature of Norm—

Masafumi NISHIGUCHI

構成

- (α) 問い
- (β) 始発点としての人間の平等
- (γ) 人間の不平等に纏わる経験的事象
- (δ) < 平等化 > の理由～< 運 > への着目そして < 運の中立化 > ～
- (ε) 行為の責任～視座の浮上～
- (ζ) < 不平等化 > されるべき処遇の根拠～規範性を志向する思考の徹底 / 不徹底～
- (η) < 平等化 > および < 不平等化 > の根拠に関する解釈の変異体
—充分主義, 優先主義, そしてロールズによる格差原理
- (θ) 結びに代えて

(α) 問い

「重度障害者は生きていても幸福にはなれない。当人が生産的協働に参加できないだけでなく、介助する周囲の者たちに対しても生産性に結びつかない負担を強いることになる。」およそそのような趣旨のことを、植松聖は自らの敢行した障害者殺傷行為を正当化する理由として表明した（2016年7月26日。相模原市津久井やまゆり苑での事件）。ここに典型的なかたちをとって表出したところの、障害者殺しを正当化する思想、そこに滲み出た規範性を色濃く帯びた論理。これを対象化することの必要性ということ。このことをまず、この小論の冒頭で挙げておこう。

植松聖による論理は、次のように言い換えることもできる。人間——種としてのヒト——であるということのみを以って、人間社会の中での平等化処遇がなされるべきであるということには、ならない。あるいはもっと強く、種としてのヒトに属する存在者に向けて平等化という処遇がなされてもよい、ということにはならず、むしろそれぞれの存在者の具有する——各身体に賦存する——能力について、もしくは発揮し得る能力について、然るべきかたちと内容を以って示されるところの閾値に満たぬ存在者たちに向けては、平等化処遇がなされてはいけな

*人間関係学科 教授

い、というように示すことができるだろう。このような規範的思考の筋道は、果たして正当視され得るのか？もし仮に、この筋道については正当視されないとするならば、人間たちの間での処遇上の不平等化ということは、あってはいけないのか？それとも、いましがた挙げた思考の筋道とは別の意味脈絡から、不平等化の根拠や判断基準を挙げることができるのであろうか？

障害者殺しの正当化という内容にまでは及び到らないとしても、個体の発揮する能力、もっと言えば業績の相違によって、各人への不平等処遇が正当化される、とする論理は、現代の規範理論の中に、その有力な潮流として見出される。たとえば、ロバート・ノージックによる自己所有権という規範的判断基準のことが、ここで採り挙げられるにあたいするであろう[Nozick, Robert, 1974, chap.7]。“私の身体は私のもの（所有物）である”がゆえに、“私の身体を外界に向けて、すなわち、人間の生存にとって有益な資源を蔵するこの世界に向けて、活動させること——労働すること——によって獲得される富は、私の所有するものとなる”。この規範性を帯びた論理は、それなりに説得力を持つ。

いまその骨格を例示したところのリバタリアンによる規範的思考の理路は、リバタリアンたることを自認する論者たちに比べると、理路としての明晰さ度合や純粋さ度合を希釈することになるとしても、我々の現に生きる社会世界において支配力を揮うことになっている多くの思想の中に、見て取られるのではないだろうか？各人にとっての善き生のありように大きな度合・強度を以って影響することになる社会的処遇の原則、特に職業上の地位や威信のありようを階層的に規定する上での一般原則として、能力主義や業績主義、もしくはメリトクラシーが他のなにものにも代えがたいほどの通用力を持ち浸透している。そのように見ることに對して、妥当性を欠いているとは言えないだろう。

上記のように、一般的処遇原則として通用力を揮うメリトクラシーに向けて、それが規範的思考に照らすならば妥当性をもつとは言えないであろうとする問題意識、これがこの小論に底流する問いである。とはいえ、メリトクラシーを排してそれに代えるべき処遇原則として妥当性を認めることができるのはどのような内実となるのか？直覚の水準において知ることができるように、これに對置するにあたって、単純な、もしくは画一処遇という意味での平板な平等化を据えればよいわけではない。人間たちの間での妥当性を帯びた中身での＜不平等処遇＞とはいかにして可能となるのか？これが、小論に底流するもうひとつの問いである。

これらの問いへの解を探り求めるための手がかりとして、小論が参照しようとするのは、カスパー・リッパートーラスムッセンによる平等主義的正義を志向する議論であり、また、リッパートーラスムッセンによる議論においてもふまえられている G.A. コーエンによる＜運の平等主義＞の立場からの規範的思考の在り方である。両者の議論に手掛かりを求めようとするのは、ジョン・ロールズによって示されたところの、＜公正としての正義＞を志向する探究の重要性を受けとめつつも、その探究の中身（の一部）に向けての納得し難さを、筆者が覚えるがゆえに、である。小論では特に、＜運の平等主義＞を精緻に体系立てようとするリッパートーラスムッセンによる議論に、先ほど記したところの問いへの解を見出そうと試みるにあたって、よりいっそうの拠り所を得ようとする。

前段落で述べたところから推察されるように、小論は、＜平等化＞の根拠と＜不平等化処遇＞の根拠という主題について、筆者による独自性を帯びた立論を全面的に展開するというものではない◆¹⁾。とはいえ、リッパートーラスムッセンによる議論に見出されるべき疑問点の提示、そしてまた、リッパートーラスムッセンによる議論をふまえて紡ぎ出し得るところの、

筆者による独自の見解の提起、これらを試みる。

小論の立場についていえば、あくまで原理的な探求として規範性を志向する思考の内容を解明しようとする立場である。それはしたがって、社会世界の現相において社会政策上の実現を期待し得る提案を、規範的な観点から行なおうとするものでは、けっしてない。この立場からの問いの立て方に向けて、そしてまた、それを解明しようとする論理展開の仕方に向けて、実践的有効性の観点から非難を投げかけようとするならば、それは意味をもたない非難となるだろう。

《β》 始発点としての人間の平等

人間たちの間での処遇をめぐる正義の在り方を問うに際しては、まず何よりも、人間の平等が思考の始発点に据えられるべきこと。このことは、規範理論において共有されている、とみてよいだろう。“人種によって”，“性別によって”，“出身階層によって”等々で人間たちの間での処遇に差異が、格差が生じてよい、とする思念が受け容れられてはならない、とする水準での共有を前提としてよいだろう。続いてさらに、人間の平等ということの内容をもう一歩先へと展開させようとするならば、道徳上の身分の平等 the equality of moral standing ◆²⁾ という水準での思考が基本的には共有され得ている、と見ることができるであろう。しかしながら、道徳上の身分の平等とはどのような中身のことを指し示すのか？個々のひとのありようの比較に即して、具象相において指し示すことができるのか？この問いに関してどう答えられるだろうか。

指し示される中身の候補となりそうなのは、およそ次のような三つの事柄である。第一に、人間は他の生物種に比してより高い知的能力を具え持っている、という事柄。この事柄に対してはすぐさま、反論が提起されることになる。すなわち、ひとそれぞれの具え持つ知的能力には大きな相違があり、甚だ低い水準での知的能力をかりうじて持つにすぎない、というひとの例を挙げることができる。そのような具体例について、他の動物種に——例えばゴリラやチンパンジーに——比べた時に、知的能力で劣るようにさえ思われることが、経験的にはおおいにあり得るだろう。このような反論可能性を想起するならば、人間の間での道徳上の身分の平等ということの中身を、具え持つ知的能力の高さに見出そうとする企図は、かなり脆く崩れ去るように思われる。

第二に、人間は自分自身についての意識——自己意識——や他者への共感意識を持つことができ、さらにまた、自分自身の周囲をなしている世界とその状況についての意識を——世界状況意識を——持つことができる、という事柄。この事柄に対しては、自己意識の度合も共感意識の度合もひとの諸個体ごとに大きな相違があり、特に反省性を明瞭に帯びたそれらをもつ個体がすべてだとはとうてい言えない、とする反論が生じるだろう。また、世界状況意識の明晰さ度合についても、ひとの個体ごとに大きな相違があることを認めざるを得ないだろう。このような反論を承けて指し示され直す可能性のあるさらなる中身の提起としては、ひとの個体の持つ自己意識や共感意識や世界状況意識のありようは個体ごとに違いがありはしても、ある閾値を設定するならば、その閾値以上という範囲にすべての人間諸個体の有する意識を認めることができるであろう、とするものが考えられる〔Williams, Barnard (1973):237〕。では、この提起を経験的に確認し得るか、と問う場合には、「然り」と答え切ることには困難を感じることもなる。謂うところの「閾値」を、どのように特定することができるのか。これに明確に答

え難くなるからだ。しかし、経験的な知覚可能性ということに囚われることなく考えるならば、イマヌエル・カントに示唆を得つつ、「我々の持つ本体たる自己（自己自体）」において自己意識や共感意識や世界状況意識が具有されると考える筋道がある。この筋道での思考に向けてももちろん、いわば形而上学的思考としての限界を、指摘することができるだろう [Lippert-Rasmussen, Kasper (2016):41]。

第三に、（いましがた第二の事柄として述べたことと関連する内容の事柄になるのだが、）各人の中心部分に、言い換えるならば自己自体に、自己意識や共感意識や世界状況意識が具有されてある、と想定し、そうであるがゆえに各人を平等な尊重の対象だと想定したうえで、経験的な知覚能力を作動させる場合には各人の間に多大なる相違が見出されることを、あえて不可視化すること——不透明体（opaqueness）として各人の内なる様態を見て取ること——によって、すべての人を対象とする、道徳上の身分の平等を認識することが可能となる、という事柄 [Ian Carter, 2011:561] を挙げることができる。これに対しても、第二の事柄への反論と同趣旨の反論が寄せられることになる。すなわち、各人の内なる様態を不透明体だと見做すにしても、そのような見做しを許す際にはその前提として、意識を具有するひと足り得るための閾値を想定しなければならないからだ。

このように見てきたところから察することができるように、人間たちの間での処遇をめぐる正義の在り方を問うに際しては、人間の平等が思考の始発点に据えられるべきこと、そしてここに謂う、人間の平等の中身を明らかにしようとするにあたっての思考の方向としては、道徳上の身分の平等という水準での思考が基本的には共有され得ていること、これらを踏まえながらも、肝腎なこと、つまり、人間の平等そして道徳上の身分の平等ということの中身についての充分に妥当な提示をすること、そのことには困難が伴うのである。この難問に関しての論究は、次々節以降に（《δ》節・《ε》節・《ζ》節に）持ち越すことにする。

《γ》 人間の不平等に纏わる経験的事象

前節での叙述中で既に触れておいたように、それぞれの人間の（意識のありようも含めての）行為のありようには大きな相違があることに気づかざるを得ない、というのが、我々が日常生活の経験的事象から感じ取り続けていることである。この大きな相違が社会世界の現相においては、それぞれのひとに対する社会的処遇上の不平等につながり、またそのつながりが正当化されもする、という事態が生じていること、これを無視するわけにはいかない。この事態と、前節で述べたところの、ひとの間での道徳上の身分の平等という水準での思考と、これら双方を統合して捉えることができるのかどうか、という点についてこの節では考察する。

まず、それぞれのひとに対する社会的処遇上の不平等はどのようにして出来るかについて、見ておこう。各人の身体が生み出され構成されるに際して不可避に作用する自然的要因、これが個体としてのひとの間に認め知られる大きな相違をもたらすことを、無視するわけにはいかない。また、各人の身体が、とりわけ誕生および幼少の時期にどのような社会的環境状況のもとで生み出され構成されることになったか、という社会的要因、これも個体としてのひとの間に認め知られる大きな相違をもたらすことを、無視するわけにはいかない。個体としてのひとの間には大きな相違をもたらされることの説明として、自然的要因と社会的要因との複合作用によって規定されるところが、すべてではないとしても相当に大きい、ということは受け容れられることであろう◆³⁾。こうして規定される大きな相違が、個体としてのひとが“社会人”

として処遇される際の有利／不利とその度合というかたちでの不平等を生じさせる要因となること、これも受け容れられるところであろう。

このように対象化できる、社会世界の現相における処遇上の有利／不利およびその度合という不平等が、自明視されたままに済まされることが多い、ということも経験的な事象に対する経験的意識として、知ることができる。ここでしかし規範的な思考としては、この事象を対象化すると、どのような問いが生み起こされるか。有利な、または不利な、処遇をうける当のひとにとって、処遇上の相違をもたらす理由が正当な理由だとして受容し得るか否か、この点をまず、規範的思考においては問う必要性に気づくことになる。ここに謂うところの規範的思考とは、ひとの間での道徳上の身分の平等という水準での思考のことである。すぐさま気づかれるように、前段落で挙げたところの自然的要因についても社会的要因についてもその作用に対して、個体としてのひとが制御し得る事物ではない。つまり事態は、それぞれのひとにとっては制御し得ない事物によって、道徳的身分としては平等であるべきそれぞれのひとの処遇上の有利／不利が、決められることになっている。この事態は、規範的思考に照らすならば、不当だというほかない。

《δ》 ＜平等化＞の理由～＜運＞への着目そして＜運の中立化＞～

前節での議論を承けて本節と次節と次々節では、規範的思考に照らすならば社会的な処遇上の正当性を帯びた相違がどのような意味脈絡においてこそもたらされるべきなのか、この基本問題に対する応答の方向性を探り求めることにする。この探り求めを、各節ごとに立てられた見出しとしての記述項目に即して、行なうことにする。この探り求めを通して示そうとする中身は、リッパートーラスムッセンによる議論 [Lippert-Rasmussen, Kasper (2016) chap. 2, esp. pp. 48-53] からの触発を得つつも、彼による論点に対する新たな解釈を提示しようとするものである。

筆者によるこの新たな解釈の提示が何故に必要なのか、その理由について説明する。リッパートーラスムッセンによる議論は、〈人間の平等〉の根拠づけに照準したいわば論理形式上の叙述に傾斜しているところから、社会世界における人-間関係を秩序正しく構築するための規範の中身を明らかにしようとするにあたっては、リッパートーラスムッセンによる議論は未だ不十分な内容に留まっていると考えられる。論理形式の妥当性を以って〈人間の平等〉を根拠づけることの重要性を認識した上で、ひとの〈平等化〉の根拠を、および、〈不平等処遇〉の根拠を、いわば肉づけるかたちで捉えることが大切になる、と考えられるところから、新たな解釈を示そうとしたわけである。なお、この探求の過程では、必要に応じて前々節（《β》節）で言及した事柄に立ち返ることも行なう。

各人の身体が生み出され構成されるに際しては自然的要因と社会的要因とが複合された様態で不可避に作用することになること、この作用の基盤を各人は制御することができないこと。しかも、この作用に強く深く規定されることによって、各人によるさまざまな行為にとっての土台となる能力が形成されること。そのことを踏まえると、各人に具有された能力が土台となって生み起こされる行為の成果のありようや業績のありようが、各人への社会的な処遇上の有利／不利という水準での相違や格差を産み出すという事態は、規範的理路からすると、斥けられるべきことになる。

いま述べた意味脈絡に関連づけてその意義を考えることができるのが、ひとの間での道徳上

の身分の平等を手繰り寄せるためのひとつの提案として、《β》節において言及したところの、次の見解である。すなわち、経験的知覚能力を作動させる場合には各人の間に多大なる相違が見出されることを、あえて不可視化すること——不透明体（opaqueness）として各人の内なる様態を見て取ること——によって、すべてのひとを対象とする、道徳上の身分の平等を認識することが可能となる、という見解。この見解に含まれている、未だ漠然としたものにとどまっている意味、これを明瞭化するという意図のもとで、この意味を分節することが大切になる。すなわち、社会的協働の中で活動して発揮される能力上の達成度合や貢献度合という部面——それらを産出するための基盤となる力やエネルギーたり得る要素に対して、各人にとっては制御できないのであり、まさにそのことを覚識する必要があるところの部面——での、各人の内なる様態については、依然として不透明体として見て取り、他方では、各人が行為を選び取り推進するという場面での制御し得る事柄に向けての制御のありようという部面については、ひいては、選び取り推進しようとする行為をめぐる責任の果たし方という部面については、透明化するように試み、評価する。このように分節することが大切なことになる、と考えられる。

ここでさらに覚識されるべきなのは、次のことだ。すなわち、各人はそれぞれ多様性を帯びつつそれぞれの善き生を——目的自体としての善き生を◆⁴⁾——、自らの制御し得ることを制御することを通して、探り当て生み出そうと試みる。普遍性を帯びた視座から各人の生を対象化するならば、いま述べた試みを不可能なことと見ることはできない。まさにこの点において——その試みにおいて——、各人は＜平等化＞されるべきことになるだろう。

このように考えて行く筋道として把握されるべきことは、各人にとって制御できない諸要素の集合態という部面と、各人にとって制御できる諸要素の集合態という部面、これを識別することの重要性である。この二つの部面を識別し得るとする判断に際しては、何が判断の拠り所となるのであろうか？ こう考えることで想到するのが、＜運＞の介在を認めることができるか否か、という拠り所である。ふたつ前の段落で言明したこと、すなわち、「各人に具有された能力が土台となって生み起こされる行為の成果のありようや業績のありようが、各人への社会的な処遇上の有利／不利という水準での相違や格差を産み出すという事態は、規範的理路からすると、斥けられるべきことになる」という言明の含意は、その根底において運の介在によってこそ捉えられるべき「各人に具有された能力」、それゆえにまた同じように捉えられるべき「行為の成果のありようや業績のありよう」、これらの結合様態に依拠して、各人への社会的な処遇上の有利／不利という水準での相違や格差を産み出すという事態が、断じて正当化されてはならない、ということなのだ。

ならば、各人への社会的な処遇の在り方が正当性をもつための方法を、どのように見出すことができるのか？ こう問うことで想い至るのが、各人に対する＜運＞の作用のありようを対象化し認識したうえで、その認識に基づいて各人への社会的補償措置を講じる——＜運の中立法＞を図る——、という方法である◆^{5) 6)}。

この節で論じた規範的思考の基礎視角をふまえて、行為の責任を追尋するための理路を、次節で探ることにしよう。

《ε》 行為の責任～視点の浮上～

ここまでの探求によってつかみ取り得たことは、こうである。すなわち、思考の始発点は、人間の平等という認識であった。その認識をもう一步進めると、人間の道徳上の身分における

平等という認識になった。ただし、この認識の内実について、妥当性と明確性を帯びたかたちで把持し得たわけではない。しかしながら、経験的な社会世界で通用し受容されている、各人の間での不平等処遇のありように着目する場合、その正当化理由に対しては規範的思考に照らして、妥当ならざることを明確に指摘しなければならないのであった。＜運の中立化＞を図ることなしには、規範的思考に照らして各人の行為を評価することが、できないわけである。言い換えると、＜運の中立化＞を図ることができれば、行為を評価し、その行為の責任を探り出し、把捉することができる。このような認識を踏まえるところから我々は、行為の責任を把捉するための視座を、見つけ出すことができるのではないだろうか？

規範的思考のあるべき姿についてここに到るまでの過程で考え深めてきた我々にとって、いましがた挙げた問いかけに対する応答を、さしたる困難を伴わずに得ることができる。＜運の中立化＞を図るということを、各人の行為の場面に照準して考えると、行為者それぞれにとって「制御し得ること／制御し得ないこと」という判別を行なおうとすることだ。「制御し得ること／制御し得ないこと」という判別は、問題化され対象化される、(行為者たるひとの)行為の単位について、あるいはまた、行為の接続について、その志向する意味に向けて、為されることになる。この判別は、行為の単位や行為の接続の生み起こされる場の状況によってさまざまな度合で影響されるであろう。その際に、行為者である当人が制御し得る余地があるか否か、制御し得るとすれば、その度合はどうであるか、というところに判別の重点が置かれることになるだろう。この判別によって、行為の責任を把捉することができる。

具象相に引き付けて、「制御し得ること／制御し得ないこと」という判別が可能となるかどうかを、考えておこう。例として、特定の機能上の要件を満たすために構成された組織体の中で、それぞれの構成員が担うことになる役割行為を、採り挙げてみよう。役割行為の志向する意味は、既に規定されてある。これに対してそれぞれの構成員が制御できる余地はないであろう。構成員各々が役割行為を遂行することによって産出し得た、組織体への貢献度合については、それぞれの構成員によって基本的には制御するのが困難だと言えるだろう。意図的に役割行為の遂行を怠るとか、自身の健康状態の保持を犠牲にしつつ、“モーレツに”勤務時間を越えて役割行為に従事するとか、そのようないわば例外的な事態のことを除いて考えるならば、制御し得ることとして、この例に間接的な意味合いで関連づけられるのは、この種の組織体の構成員として所定の役割行為に従事することに、自らにとっての善き生の在り方を見出しそれを享受したい、とする意味志向を、当の行為者が意図的に選び取る場合である。役割行為のような例に囚われずに、ひとりひとりの善き生をかたちづくるにあたっての行為選択の局面のことを考えると、その局面においては、もし仮にそれなりの前提条件が備わることになるならば、既定の意味志向に繋ぎ留められるという画一性よりも、むしろ多様性が息づく場を得る可能性が、生まれるようになるだろう。そして、ここに謂うところの、それなりの前提条件が備わることになるとは、＜運の中立化＞が積極的に図られる社会——公正な社会——をかたちづくる方向が獲得されることだ。

要するに、行為の責任を明らかにするための視座としては、行為の単位について、あるいはまた、行為の接続について、「制御し得ること／制御し得ないこと」という判別を行なおうとすること、これを挙げるができる。

《ζ》 ＜不平等化＞されるべき処遇の根拠～規範性を志向する思考の徹底／不徹底～

前々節（《δ》節）で＜平等化＞の理由もしくは根拠について考察したわけであるが、そこでの考察によって獲得されることになった知見が、＜不平等化＞されるべき処遇の根拠を問おうとするこの節においても生かされることになる。つまり、行為者にとって制御し得ることを制御しているか否か、制御している場合に制御の度合はどうか、この点についての評価に基づいて、行為者に対する妥当な処遇の在り方が判断され決められることになる。複数の行為者に対する処遇の在り方に関して、この理路を経た判断における結果として一致する場合には＜平等化＞処遇がなされ、判断における結果として相違する場合には＜不平等化＞処遇がなされる。規範性を志向する思考を徹底させるには、この理路を貫くことこそが必要条件となり、同時に、この理路を貫くことが十分条件ともなる。

翻って、経験的世界の現相において上記の理路が採られているか否かを問うならば、端的に「否」と答えざるを得ないであろう◆⁷⁾。経験的世界における処遇のありようについての原則として挙げることができるのは、何よりもまずメリトクラシー——業績主義もしくは能力主義と翻訳されることの多い原則——である。この原則が一般的に採られることの理由を殊更に明示する必要もないかのようにして自明視された様態において、この原則が広範に行き渡っている。そのようにして受容されるのはなぜか。まず、いわば客観性を帯びた適切さをそれが持つ、と思われるからである。共通の業務に携わる行為者たちの間でその成果を——業績を——比較することによって、成果の相違を認識できるのであり、その相違に応じた処遇の相違が為されて然るべきだ、と思われて済まされるからだ。次いで、この原則に依拠するならば、業務に携わる行為者それぞれが自らの成果を向上させるように意識を持つよう方向づけること、これが行なわれ易くなると思われるからである。このことはまた、行為者たちの所属する集団としての業績向上に結びつけることができる、とする思念にもなり、この思念が通用性をもって受け容れられるという期待を生み出すことにもなるからだ。そしてさらに、特に生産性の高い行為者、すなわち、業務に携わる過程でそれを発展的に用いることにより優れた成果を産出するであろうという見通しを持つことのできるどころの高い能力を所有する行為者、そのような行為者をして、業務遂行にエネルギーを集中させるよう促すための誘因として、おおいに効用があると思われるからである。

さてここで、小論の掲げた問い、すなわち、規範性を志向する思考において人間の平等から、そしてそれを一歩進めたかたちでの、人間の道徳上の身分における平等という始発点から、メリトクラシー原則の持つ意味を捉え返すことを試みよう。いかなる規範性を拠り所にしているのか、という視座からメリトクラシー原則を捉えようとするならば、自己所有権をこそ規範としての拠り所にしているのを見出すことができる。既に《α》節の中で言及したノージック流の論理——“私の身体は私のもの（所有物）である”がゆえに、“私の身体を外界に向けて、すなわち、人間の生存にとって有益な資源を蔵するこの世界に向けて、活動させること、つまり労働することによって獲得される富は、私の所有するものとなる”、という規範性を帯びた論理——は、経験的世界の現相において甚大な支配力を揮っている。したがってまた、自明視されつつ現に通用している。行為の結果としての成果の多寡を基準にする処遇、という点で、その論理としてのわかり易さが支えになっているとも言えるだろう。しかしながらその論理を、《δ》節および《ε》節で展開した論点に照らして対象化するならば、そこにはまさに規範たり得るための妥当性が欠落していること、むしろ恣意的な判断が強くはたらいているのを、知

ることができる。規範性を志向する思考にとっての不可欠の要件を、メリトクラシーは欠落させているのだから。

私の身体の形成のところで私の制御が及ばぬこと、このことの、規範性を志向する思考に照らしての意味を、把捉しようとする構え、これにおいて自己所有権論、そしてそれに強い結びつきを有するメリトクラシー論は、不誠実というほかない。そしてその不誠実さは、狭くリバタリアンだけに留まるのではなく、リベラルな立場を取ると称する多くの論者たちの間にも、(リバタリアンに比べると希釈された内容になるとはいえ、) 共通に見出すことができる。経験的世界の現相においてメリトクラシーが通用力を発揮するのは、そのためである。ひとの間での処遇の在り方の正義とはいかにかたちづくられるべきか、という小論の根底をなす問題意識のところから、こうした社会世界の状況を対象化すること、そしてその対象化から生み出されてくるであろう、状況の変革の必要性認識を明敏にすること。規範理論の立場から言明し得るのは、このことに収斂する。

探求上のこうした筋道を通して獲得された＜平等化＞の根拠および＜不平等処遇＞の根拠に対する認識は、まさに＜運の平等主義＞に拠って立つ認識にほかならない。この認識の、平等主義思想全体の中での位置づけとしては、義務論的平等主義の中に位置づけ、義務論の中で持つその特殊性の性質について言えば、ひとそれぞれの境遇および各人の行為それぞれのありようを対象化し、「制御し得ること／制御し得ないこと」という判別基準によって義務遂行の有無と度合が判断される、という性質のものとなる。この判断に際して＜運＞の介在の有無およびその度合への注目が、根底をなすわけである。

（η） ＜平等化＞および＜不平等化＞処遇の根拠に関する解釈の変異体 —— 充分主義、優先主義、そしてロールズによる格差原理

この節では、リッパート・ラスムッセンによる要を得た整理 [Rippert-Rasmussen, Kasper (2016):27-31] に依拠することによって、広い視野からは義務論としての性質を帯びた平等主義思想の中に位置つきながらも、その＜平等化＞および＜不平等処遇＞の根拠に関する解釈のあり方に関しては＜運＞の平等主義とは異なっている、そのような規範理論のかたちとして、充分主義 sufficientarianism, 優先主義 prioritarianism, ロールズによる格差原理 difference principle という三つのかたちを採り挙げ、＜運＞の平等主義との相違を捉えるように図る。

第一に、充分主義の規範理論としての特質を対象化しよう。この理論が道徳上の義務と考えるのは、何らかのかたちで特定されて示される充分性基準を、ひとがそれぞれ充足し得ることである。通常は財や資源の量という形態で充分性基準が示されるが、何を根拠として充分性基準が特定されるのか、というこの肝腎な点については、明確にされていないように思われる。とはいえ、新たに産出されて活用可能になった財や資源を分配するにあたっては、充分性基準を既に満たしているひとにではなくて満たしていないひとに分配すること、これが分配原則の基本となる。それゆえにまた、一回限りで終始するのではなく続発するかたちで産出され活用可能になる新たな財や資源が、充分性基準をいまだ満たしていないひとに分配するのを原則とすることで、より多くのひとが充分性基準を満たし得るように——すべてのひとの充分性基準の充足を目標とする方向づけを以って——分配・再分配が進展すべきだとされる。充分性基準を上回る度合の大きいひとの所有する財や資源と、上回る度合の小さいひとの所有する財や資源と、これら双方との間での再分配が必要になるとは、この規範理論は考えないこと、このこともまた留意されるべきであろう。

この分配原則の規範性の拠り所が、すなわち、財や資源の量という形態で充分性基準を普遍的に充足させるべきだとする拠り所が、＜運＞の平等主義における規範性の拠り所と比べて、果たして妥当性をより堅固に持ち得るのか否か？「制御し得ること／制御し得ないこと」という判別基準によって義務遂行の有無と度合が判断されるところの、後者に比して、その妥当性が薄弱だと考えられる。

第二に、優先主義の規範理論としての特質を対象化しよう。この理論が道德上の義務と考えるのは、暮らし向きのより悪いひとが存在するならばそのひとの暮らし向きをより善くすることであり、そのひとの暮らし向きの向上に資する資源や財について、それが優先されるかたちで分配される、ということである。つまり、暮らし向きの悪さ度合が大きくなればなるほど、それだけ、その暮らし向きにあるひとに対する資源や財の提供の持つ道德上の価値が高くなる、と考えるわけだ。それゆえに、所与の分配様態においてより少ない所有分を持つひとが優先されるかたちで、新たに産出されて活用可能になった財や資源を分配する、という意味脈絡を採るところの次なる分配が、為されるべきことになる。規範理論の持つ平等主義的性質という観点からこれを充分主義と比べるならば、この優先主義の方がより平等主義的性質を帯びている。

とはいえ、この分配原則の規範性の拠り所が、すなわち、暮らし向きのより悪いひとの暮らし向きを善くするのを優先することが（そのための手段として、財や資源の量という形態で優先主義を普遍的に充足させることが）、＜運＞の平等主義における規範性の拠り所と比べて、果たして妥当性をより堅固に持ち得るのか否か？「制御し得ること／制御し得ないこと」という判別基準によって義務遂行の有無と度合が判断されるところの、後者に比して、その妥当性が薄弱だと考えられる。

第三に、ロールズによる格差原理の規範理論としての特質を、対象化しよう。その特質はまず、暮らし向きの最も悪いひとの暮らし向きを向上させることに、道德上の義務の在り処を見定めようとするところに、ある。それは、言い換えると、暮らし向きの善さの度合についての布置が帰結においてどのようになろうとも、そのことにはかわりなく、最も不遇なひとにとっての絶対量としての財の所有状況が改善されることを以って、道德上の義務を果たすことになる、という判断が下されるわけである。所与の分配様態において最も少ない所有分を持つひとが再分配の対象として優先されるかたちで、新たに産出されて活用可能になった財を分配する、という意味脈絡を採るところの次なる分配が、為されるべきことになる。しかも、このような意味脈絡において活用可能となる新たな財の産出を促すことになるであろう誘因として、生産性の高いひとたちの期待し見込み得る財の所有の増大ということが、妨げられはしない [Rawls, John (1971) chap.3]。このような脈絡においては、「制御し得ること／制御し得ないこと」という判別基準によって義務遂行の有無と度合が判断されるべきだ、という規範意識は不在である。

この分配原則の規範性の拠り所が、すなわち、暮らし向きの最も悪いひとの暮らし向きを向上させることに、道德上の義務の在り処を見定めるべきだとする拠り所が、＜運＞の平等主義における規範性の拠り所と比べて、果たして妥当性をより堅固に持ち得るのか否か？小論が特に《δ》節から始まり《ε》節を経て《ζ》節にまで到る探索の過程を通して獲得した知見、すなわち、＜運＞の平等主義においてこそ立ち現われる規範性に基づくことが、義務論としての妥当性をまっとうに充足し得るという知見、これに背く内容を、ロールズによる格差原理が孕んでいるのを、見て取ることができる。つまり、「制御し得ること／制御し得ないこと」という判別基準によって義務遂行の有無と度合が判断されるところの、＜運＞の平等主義におけ

る規範性の拠り所に比して、ロールズによる格差原理の持つ規範性の拠り所は、その主張し得る妥当性度合としては薄弱なものにとどまっている、と考えられる。

《θ》 結びに代えて

小論は、ひとそれぞれの相違にもかかわらず、その道徳上の身分において各人が平等に尊重されるべきだとする想念、この想念が妥当な根拠を以って主張され得るのかどうか。この問いを基底に据え、それへの応答の在り方を探求した。その探求を通して見出された応答の在り方とは、次のようであった。すなわち、各人はそれぞれ多様性を帯びつつそれぞれの善き生を、自らの制御し得ることを制御することを通して、探り当て生み出そうと試みる。普遍性を帯びた視座から各人の生を対象化するならば、いま述べた試みを不可能なものと見ることはできない。その試みにおいて、各人は＜平等化＞されるべきことになる。

この応答をふまえて次に小論は、正当性に支えられて、各人への不平等処遇が為され得るための理路の在り方、これを探求することを試みた。この探求を通して見出された理路の在り方とは、次のようであった。すなわち、行為者にとって制御し得ることを制御しているか否か、制御している場合に制御の度合はどうか、この点についての評価に基づいて、行為者に対する妥当な処遇の在り方が判断され決められることになる。この理路を経た判断における結果として一致する場合には＜平等化＞処遇がなされ、判断における結果として相違する場合には＜不平等化＞処遇がなされる。規範性を志向する思考を徹底させるには、この理路を貫くことこそが必要条件となり、同時に、この理路を貫くことが十分条件ともなる。

既に繰り返し強調してきたように、小論の探究上の基礎的な構え方は、あくまで規範性を志向する思考の徹底を図ろう、とする構え方である。この構え方を貫きつつ、問題化されるそれぞれの行為者にとって＜制御し得ること / 制御し得ぬこと＞を識別し判断することにおける妥当性の確保、これがいかにして可能か、という課題が意識化されなければならないであろう。今後の探究課題として銘記しておきたい。

【註】

- 1) 筆者による独自性を帯びた立論を全面的に展開するという域にはいまだ到達し得ていないことを、筆者は自覚している。大半においては、リッパート-ラスムッセンによる議論から示唆を得ることのできる知見、これを確認するにとどまっていることを、認めなければならない。しかし、いくつかの箇所においては、彼による議論に対する疑問点として取り挙げるにあたいうる事柄を示し、筆者による独自の見解を提起することを試みもしている。
- 2) 「道徳上の身分の平等」という語の含意について、念のため、述べておこう。「道徳」とはそもそも、ひとが間柄において生きていくに際して必要となる諸規範のうちで最も基礎となる規範としての意味を持つ。各人を、単なる手段としてではなくて、つねに同時に目的として遇すべきだ、とするカントの定言命法（のひとつの表現の仕方）に依拠した間柄の根本規範に則ろうとするかぎりは、各人の人間性を、間柄を構築するに際しての目的として、平等に尊重すべきことになる。まさにこのことを、「道徳上の身分の平等」は含意している。すなわち、ひとが間柄において生きていくに際して最も基礎に捉えられるべき規範という観点から見た身分——地位もしくは位置づけ——として、各人は（ひとはずべて）平等に尊重されるべきである、という含意だ。
- 3) 個体としてのひとの間には大きな相違がもたらされることの説明として、本文中で記述された自然的要因と社会的要因との複合作用ということのほか、さらに下記の社会的要因が付加されるかたちで強調されて指

摘されることがある。すなわち、学校教育においてひと（こども・青年）それぞれの必要に応じてどのように効果的な学びの支援や発達保障の措置が講じられるか、その点での有効性度合が、個体としてのひとの間に見られる大きな相違をもたらすことのもうひとつの有力な要因として、認識される必要がある、という指摘だ。この指摘はまた、次のようなかたちを採って表現されることも可能となるだろう。すなわち、たとえ自然的要因から資質・能力の上で恵まれていない個体であるとしても、その個体の享受できる教育諸条件を手厚く整備し、行き届いた学習支援が豊富に提供され保障される、という教育環境が高い質において提供されるならば、当の個体に随伴していた劣位を、克服することができる、という指摘のかたちである。

- 4) 社会の現相において支配力を揮ってある、人間評価の視線からするならば、“ただ単に生きているにすぎない”と見做されるところの生であろうとも、当の生を保とうとするその在り方が、目的自体としての善き生への志向≡希望のかたちであり内実でもある。この境位において把握されるべき「善き生」を指し示している。
- 5) ここに示した議論の組み立て方に対して、ある向きからは、経験的な世界の中で＜運の中立化＞を図ることの甚大なる困難ということが、すぐさま取り挙げられ突き付けられること、そのことが予想される。正義に関する原理的な認識や判断に多重に多大に曇りが纏わり付いている経験的な世界において、謂うところの「甚大なる困難」があることを認めなければならない。とはいえそれは、本文中の論脈で記している「＜運の中立化＞を図る」ことの規範的重要性への認識を、弱めることができる性質のものではない。
- 6) ここに謂うところの「社会的補償」ということがどのようにして実行可能となるのか、その基本的な方法を考えておくことは、大切なことだろう。ここでは、その構想についてのみ、概略を記しておこう。社会構成体の全体集合と部分集合という諸単位ごとに、相互の関連性をふまえつつ、善き生の構築に必要な財や資源や都合のよさ（advantages）の分配を一定期間ごとに行なうこと、それが企図されることになる。その分配を企図する主体となるのは、＜運の中立化＞に基づいて各人にとっての善き生の実現度合の様態を公正に評価して、新たな分配の規範的な在り方を決定するために構築される組織（——たとえば“公正分配委員会”などと名指される組織）である。
- 7) 「経験的世界の現相」とひとまずは表わしておくが、もう一步立ち入ってというならば、経験的世界の中でのいわば公式化された組織体の中での処遇のありようを対象化するときに、このように捉えることができる、ということを示している。非公式の集団での人-人間関係や親密な結びつきとしての人-人間関係の中では、ひとそれぞれへの処遇が——それぞれにとっての善き生の構築を促そうとする関係行為が——本文中で示した理路に近似した様態においてなされることもある。それを否定することはできない。

【文献】

- Carter, Ian (2011) Respect and the Basis of Equality, in *Ethics* no.121
 Lippert-Rasmussen, Kasper (2016) *Luck Egalitarianism*, Broomsbury
 Nozick, Robert (1974) *Anarchy, State, and Utopia*, Basic Books
 Rawls, John (1971) *A Theory of Justice*, Harvard University Press
 Williams, Bernard (1973) *Problems of the Self*, Cambridge University Press